

ゲーテの認識方法について（1）

芳 原 政 弘

Motto

„Wenn ich nach meiner Weise über Gegenstände philosophierte, so tat ich es mit unbewußter Naivität und glaubte wirklich, ich sähe meine Meinungen vor Augen“. — *Einwirkung der Neuerer Philosophie* —

「わたしは自分の方法で諸対象について哲学したとき、わたしはそれを無意識の素朴さをもって行なっていた。そして実際、わたしの見解を眼前に見るように思った」¹（筆者傍点） 『近代哲学の影響』

ちょっとしたエピソードの一コマであるが、後年ゲーテは、シラーとの交友関係のはじまりについて、『幸福な出来事』² *Glückliches Ereignis* (1817) と題する含蓄ある内容の一文を書いている。

それによれば、かれはイタリア滞在中に、すべての芸術分野において、従来より一層「明確と純粹」の境に達しようと修養につとめ、そのあいだドイツに起っていたことに無頓着でいたのだが、いざ帰国してみると、新旧の文学作品が、大いに幅をきかせて、読書界に広く影響を及ぼしているのを見て驚いた。その中でも、ハインゼの『アルディンゲロ』 *Ardinghello* (1787) とシラーの『群盗』 *Räuber* (1781) とが、かれに極度の不快感を与えた。特に、後者が読者の称讃を博しているのを見て、イタリア旅行を

契機に Sturm und Drang の空想と幻想の悪夢をめぐり去り、古典主義の確立を目指していたゲーテにとって、みずから心がけて脱却しようとしていた「倫理的、かつ演劇的背理」が、「気力はあるが、未熟な才人」シラーによって、逆に奔流のごとく祖国に氾濫させられていることに、強い反感をいだいたのだった。「わたしは最も純粋な思想を涵養し、それを世に伝えようとしていたのだが、いまやアルディンゲロとフランツ・モールのあいだに押し詰められている自分を見いだした。」

そんなわけで、かれは同じヴァイマルに滞在し、しかもお互い近いところに住みながら、シラーを故意に避けた。『ドン・カルロス』 *Don Carlos, Infant von Spanien* (1787) の出版も二人を接近させず、また二人の共通の友人たちのあらゆる勧誘をも退けて、ゲーテはシラーといわばにらみ合いの状態でも暮していた。『優美と尊厳について』 *Über Anmut und Würde* (1793) もかれを和解させることがなかった。つまりシラーはこの論文において、第一に「偉大な母、自然に対して忘恩的」であり、第二に「自然を独立した、最も低い所から最も高い所にいたるまで、澁刺として法則的に生産するものとして見ていない。」ことが、かれには不満であった。そのうえある手きびしい個所³ がゲーテ自身に当てつけて言われたとも解釈できた。この二つの「地球の直径以上に隔絶」した精神的対照者は、しかし偶々相会する機会を得て、「幸福な出来事」が起ったのである。

ゲーテは次のように書いている。1794年7月⁴、「当時バッチュは驚くべき精励によって、みごとな収集と、すぐれた設備を基礎とした自然研究の学会の活動を指導していた。この学会の例会にわたしはたいい出席した。あるときわたしはそこでシラーに出会った。」二人は偶然にも同時に退席して、話を交わす。かれは講演の内容に関心をもっている様子で、「あんな切れ切れのような自然の取り扱い方法」は、自然研究を好む素人の気に入るはずはないという、ゲーテはこれに対し、あんな方法では専門家でも近づけない、おそらくあれとは異なった方法、「自然を分離した切

れ切れのものとして処理しないで、自然を作用し生けるがままのもの、全体から部分へすみゆくものとしてあらわす他の方法」(傍点筆者、以下同様)があると答えた。

シラーはゲーテの見解をさらに説明してくれと望んだが、それを聞いて、自分の疑念を包み隠さず語った。すなわちかれは、ゲーテの主張するようなものが経験からのみ生まれてくるとはどうしても承認できなかった。

二人はシラーの家までやってきた。話につられてゲーテは家の中へ入る。そこでゲーテは植物の変態 (Metamorphose der Pflanze) を熱心に説明し、特徴を素描して「象徴的な植物」をシラーの目の前に描いてみせた。話が終ったとき、シラーは頭を振って、「それは経験ではありません。イデーです。」といった。ゲーテはこの一言を聞いてむっとして二の句が告げなかった。なぜならこれまで二人を分離していた点が、この言葉でくっきりと浮びあがってきたからである。『優美と尊厳について』の主張がまたかれの心によみがえった。以前からの憤懣がむらむらと出かかった。が、ゲーテは気を取りなおして答えた。「わたしは、それと知らずにイデーを持っている、しかも眼で観ているということは、私にとってうれしいことだといえましょう。」

シラーも多くの処世術と礼儀をわきまえ、また目前の『ホーレン』 *Horen* の発行のために、ゲーテを遠ざけるよりむしろ引き寄せようとした。そして教養あるカント学者として応答した。ゲーテの頑固な現実主義のため、論争がさかんに交わされ、それから停戦となった。その結果、両者のいずれも自分を勝利者と思うことができず、また敗者とみなすこともできなかった。だが「次のような命題がすっかりわたしを不幸にした。『およそイデーに適合する経験というものがあるとしてあり得ましょうか。というのはイデーの特質はいかなる経験もそれに一致し得ないという、ちょうどその点にあるのですからね。』わたしが経験だと言明したそのものを、かれがイデーと考えたとすれば、この両者の間には、何かある媒介するも

の、連関するものが存在するに相違なかった。」と報告されている。そして最後に「それにしても最初の一步が踏み出された。シラーの吸引力は大きかった。...かくてわれわれは主観と客観のあいだの、決して完全には和解されない最大の対立を通じて固い交友を結んだのであるが、それは中断されることなく継続し、われわれおよび他人にとって多くの利益をもたらしたのである。」と結んでいる。

以上多少詳しすぎるほど本文に即しながら、二人の邂逅の模様をのべた。シラーの方も、実はこの出来事について次のようにのべている。それはケルナーに宛てた手紙で、そのときのゲーテとの対話について、「われわれは六週間前、芸術と芸術理論について長い、広範囲なことを話しました。われわれが全く異った道を歩んで到達した根本的考え (Hauptideen) を互いに披瀝し合いました。二人の考えには思いがけない一致があり、それが実際観点の最も大きな相違に由来していることだけに、一層興味深いものでした。各人自分に欠けているものを受けとり、その代り何かを与えることができました。この時以来この植られた考えはゲーテにおいて根をすえ、かれはいま、わたしに結びつき、これまで一人で鼓舞されずに歩んだ道を、わたしと共に歩もうという要求を感じています。」⁵と書いている。

シラーのこの記述の方が、対話後六週間のものなので、時期的にみて新しい報告であるが、両者の記述に多少のくいちがいがあがる。つまりゲーテは対話のテーマを自然科学だけに限定しているのに対し、シラーは芸術と芸術理論について対話したとのべている。さらにゲーテは両者の見解の一致についてまだふれておらず、Realismus と Idealismus の論議について「経験とイデーのあいだに、ある媒介するものがあるにちがいない。」と付言して、両者を対立的に説明しているにすぎない。

二つの報告の真偽のほどはわからぬが、おそらく話題は自然科学の問題から美学の問題にテーマが移ったのだろう。そしてそれぞれ独自の哲学的見地に立って論争が展開されたことに相違ない。すなわち、ゲーテはこの

対話後すぐシラーに宛てた手紙⁶の中で、これからもお互いのイデーの交換をつづけたいと語り、またシラーの方でも、ゲーテの誕生日にあたって感歎の念をこめて寄せた有名な長文の手紙の中に、この前の会話の内容は、数年来自分もたえず関心をもって考えてきた対象に関するものであり、ゲーテの考えによって自分のすべての考えを動揺させられた旨のべている。さらに詳細にゲーテの自然観察の方法から芸術家としての特性についてまでおよんでいるところから、当時の二人の対話も同様な経過で展開したものと考えられてよい。そしてシラーにとっては芸術と芸術理論の問題が、ゲーテの方は自然科学の問題、つまり根源植物 (Urpflanze) のこと、および世界認識の方法についての問題がことさらかれの心に鮮明な印象となって残っていたのであろう。シラーはさらに、この手紙の中でおそらく先の対話の内容を十分反省吟味した上で、次のような注目すべきことをのべている。「わたしには多くの思弁的イデーに対して、容体、形態が欠けていました。ところがあなたはそれへの道へわたしを導いてくれました。静かにまた純粋に事物の上に注がれるあなたの観察する眼は、思弁や、ただ自分にのみ聴従する恣意的な想像力がともすれば迷い込む横道にそれる危険に決してあなたを陥らしめることはありません。あなたの正しい直観のうちに、分析が苦しんで求めているすべてのものが、それよりはるかに完全な形で存在しています。ただそれは一つの全体としてあなたのうちにあるのですから、あなたにはご自分の富が隠されているのです。というのは、残念なことにわれわれは自分が分析するものよりほかには知らないのですから。それであなたのような精神の人々は、自分たちがどれだけ深く進んでいるかを知っていることは稀で、また哲学から借りてくる理由はなく、かえって哲学の方でそれらの人々から学ぶことができるということを知る人も稀なのです。哲学は与えられたものを単に分析することができるばかりです。しかし与えるということ自体は分析家の仕事ではなく、天才の仕事です。天才は純粋理性の暗い、しかも確実な影響を受け

て、客観的な法則にしたがって物を結びつけるものです。．．．あなたは自然の必然性を求めています。しかも最も困難な方法でそれを求めています。．．．あなたは個体を明らかにするため、自然全体を綜合する。諸現象の全体の中に個体に対する説明根拠を求めます。』⁷と語り、ゲーテの自然に対する認識方法を自分の立場と比較し説明している。

さて、以上のべてきた通り、両詩人の出会いは、自然科学研究の会合を機縁とするまことに偶然にほかならなかつたが、論争を重ねているうちに、お互いにとって欠くべからざる存在となった。以後、二人はお互いに啓発し合い、相手を精神的対照者として認め、そうすることによってたえず自己省察を試み、協力一致して向上する二人の関係は、美しい不滅の友情としてドイツ文学史に残るとともに、二人の共同事業はドイツ精神史上輝かしい隆盛期を実現させるにいたつたが、いまここでこの交友関係の実りゆたかな成果について論ずるつもりはない。むしろ、ここで注目したいのは、実際の事件より20年以上すぎて、ゲーテがシラーとののはじめての出会いのいきさつをのべつつ、書いている論争のテーマそのものである。

周知のように、ゲーテは現実主義者といわれている。かれのいろいろな発言からそれはうかがわれるが、たとえば、『近代哲学の影響』の中で、「本来の意味の哲学に対して、わたしはそれを受け入れる器官をもっていなかった。』⁸と語り、またエッカーマンとの対話でも、「わたしはいつも哲学にとらわれないようにしてきた。実のところ、常識の立場がわたしの立場であった。』⁹とのべている。さらにヴィルヘルム・フォン・フンボルト宛の手紙の中で、フィヒテのことにふれたあと、「あなたもよくご存知のようにドイツ人は昔さながらに思弁という真っ暗闇の中に住むべく呪われている。』¹⁰と語っている。が、かれは思弁そのものを否定しているわけではない。「思弁的なものでも、すぐ自家葉籠中のものにすることができるほど自分に近づけられるなら、われわれ常識家にとってまことに結構なことである。』¹¹とのべている。

かれは自分の立場から思惟のための思惟を好まなかった。かれは考える (denken) ことより観る (anschauen) ことを好んだ。観ることがむしろかれの立場であった。「考えることは知ることよりもおもしろい。が、観ることよりおもしろくない。」¹²と語る。かれはみずから「世界を把握する器官は何よりも眼であった。」¹³という。「眼の人」ゲーテはまた次のように説明する。すなわちかれは「耳は啞であり、口は聾である。ところが眼は聴き、かつ語る。眼において、外から世界が映り、内からは人間が映る。内なるものと外なるものとの全体性が眼を通じて完成される。」¹⁴と語る。耳の機能は、外界から音を聞き入れるが、内面を語ることはできない、口は内から表現することができるが、外界を受用することができない。しかし眼において内と外、小宇宙と大宇宙の一致・調和が成立する。外からは自然が内からは精神が映る。主観と客観の全体性は眼を通してはじめて完成される。ゲーテは自然観察の際、「一種の主観的な全体」¹⁵が、「形態と色彩によって汲みつくされる眼の世界」¹⁶が示現されると語る。すなわちかれにおいて、世界を認識するとき内と外とは分離されていない、Ich と Welt は完全に一体となってかれの眼に映じてくる。したがって、かれにとって世界を認識するということは、内界と外界との連繋が確立されることだということができる。

この眼を基盤とする内と外との連繋という形式をとるゲーテの認識方法とは、それではいったいどんなものか。かれみずから『含蓄ふかい一言による有意義な励まし』*Bedeutende Fördernis durch ein einziges geistreiches Wort* (1823) の中に次のようにのべている。すなわち人類学者ハイน์ロート博士が、ゲーテの認識方法を評して対象的思惟 (Gegenständliches Denken) と特徴づけ、ゲーテの思惟が「対象から分離しないこと、対象の諸要素、つまり諸々の直観が思惟の中へ入りこみ、思惟によって最も緊密に貫かれていること、すなわち観ることはそれ自身考えることであり、考えることは観ることである。」¹⁷とのべた。これに対してゲーテはその通り

だと心からの同意を与えている。さらにかれはこの論文の末尾に「自分のあらゆる方法は、派生 (Ableiten) に基づくことを見出した。わたしはある重要な一点 (ein prägnanter Punkt) —— そこからいろいろなことが導き出される、あるいは、わたしが努力し感受しつつ慎重かつ忠実に仕事にむかうので、むしろその一点がいろいろなことを、みずから進んで産出しわたしに提出する——を見出すまで、わたしは決して、休むことはなかった。もし経験の中に何か推論する (ableiten) ことができない現象が見出されれば、それを問題として残しておく、そしてわたしは長い生涯においてこの方法が非常に有益なことを知った。というのは、たとえある現象の由来や結合の謎がながらく解かれず、これを放置しておかねばならぬときでも、数年後に忽然として一切のものが最も美しい関連において解明されるにいたるからだ。」¹⁸とのべている。つまりゲートにとって「観ることは、すべて観察することへ、観察することはすべて考えることへ、考えることはすべて結び合わせることへ移りゆき、かくてわれわれはいつでも世界へ注意深い眼を注ぐときすでに理論をはじめている。」¹⁹ ということになる。世界を観ることは、かれにおいては Ableiten の作用によって、世界を理論化すること、「一切のものが最も美しい関連において解明されるまで」理論化することである。

かれは対象的思惟をさらにかれの創作方法に還元して「さて、わたしの対象的思惟についていわれることは、おそらく同様に対象的詩作というものに関係づけられるかも知れない。ある大きなモチーフ、聖徒伝、太古の伝説などがわたしの心にとても深い印象を与えて、それが40年、50年も生き生きと心の中にとどまっていることがある。そしてこんな貴重な形姿がしばしば想像力の中で、もちろん外形は変えられても本質にはいささかも変化せず、もっと純粋な形式、もっと決定的な形式にむかって成熟しながら、新しく生まれかわるのをみることは、わたしにとって最も美しい所有に思われる。」²⁰とのべている。この「対象的詩作」の説明から、付言し

て「上にのべたことから、わたしの即興詩 (Gelegenheitsgedichte) への愛着も説明がつけられよう。ある状態に何か特殊なものがあると、わたしを動かし、抗いがたく即興詩に引き寄せるのだ。したがってわたしのどんな小曲を取り出してみても、その底に何か特別なものがひそみ、多少なり意義ある果実に、そこばくの種子が内在することに気付くだろう。」²¹ と語り、「即興詩」の成立が、対象的思惟に起因しているとのべている。

かれの認識方法が、すべて Ableiten に基づいていること、これを他の個所でかれはみずから次のように説明している。つまりかれの眼が「観て」 „anschauen“ いると、そこに「想像力」 „Einbildungskraft“ が加わってくる。そしてまず、「追構成」 „nachbilden“ する。諸対象をくりかえすだけである。次いで「想像力」は anschauen された形象 (Bilder) を「活動」 „beleben“、「展開」 „erweitern“ させ、「変形」 „verwandeln“ さすことによって生産的 (produktiv) になる。²² ここに新しい所産が生みだされる。これは換言すれば、かれにとって anschauen の働きに、必然的に「形成する」 „bilden“ する働きの伴っていることを意味する。すなわち「対象的思惟」において、「観る」ことは「考える」ことであり、「考える」ことは「観る」ことであるというのは、「観る」作用と「考える」作用とのあいだに「形成する」作用を媒介としているのである。かれにとって外界 (対象) を観ることは、内面において形成することであり、内面的に形成することは、すなわち考えることである。そして考えながら、形成しながらふたたび対象を観る。主体と客体との合一が、この形成作用において完成される。ゲーテは芸術に対する感懐を吐露した詩群中の一篇に次のようにうたっている。

きみの胸に燃える自然も
きみに何の役に立とう
きみの周囲の芸術品も
きみに何の助けになろう

愛に満ちた創造力が

きみの魂をみだし

きみの指先で

ふたたび形成されないならば

鑑賞家と愛好家へ²³

かれは自然も芸術品も「愛に満ちた創造力」 „liebevolle Schöpfungskraft“ による形成作用がなくては、無益であると主張している。「芸術はそれが美的である以前に造形的 (bildend) である。しかもそれ (この造形的な芸術) は美芸術と同様に、いな、しばしばそれ以上に真実で偉大な芸術である。なぜなら人間の中には、存在が安定するとたちまち活動的に働く造形的な自然があるから。…」²⁴とすでに若きゲーテは語っている。かれは、自然を把握するとき、自然の中の個々の美を抽出することによっても、また美という普遍的な概念によっても把握しなかった。かれは自然をその本質によって捉えた。すなわち自然の本質は「形成すること」 „Bilden“ —— この根本現象の前には、原理としての美も二義的なものとなる——にある。かれはこの自然の本質に即して芸術を考えた。すなわち自然の所産である人間の中には、活動的に働く「形成する自然」 „eine bildende Natur“ がある。この造形的自然から産出される芸術は美的で (schön) あるより以前に形成的 (bildend) であると、芸術を「形成する」作用において把握した。²⁵

対象を、それが自然であれ芸術作品であれ、bildend に把握することは、対象を全体的に把握することである。レッシングが『ラオコーン』 *Laokoon* の17章において、対象を受用する方法を「われわれは、いかにして空間中に存在する事物の明瞭な表象に達し得るか。われわれはまずその事物の各部分を別々に眺め、次にこれらの各部分を結合し、最後にその全体の表象を得るのである。人間の感覚は、これらの相異なる作業を驚くべき速さをもって成し遂げるが故に、このいくつかの作業は、ただ一作業のように思われるのである。またわれわれが、各部分の諸概念、ならびにそ

これらの結合にほかならぬところの全体の概念を得ようとするときには、この素速さというものは絶対に必要なのである。」とのべているが、これは個物から総体へ、部分から全体へとすすむ方法を示すものである。しかしゲーテは「幾多の誤解を避けるために、わたしは何よりも次のことを説明すべきであった。自然の諸対象を観、取扱うわたしの方法は全体から個別へ、全体の印象から各部分の観察へすすみゆく。」²⁶とのべて、みずから自分の方法を全体から部分にすすむ方法と規定している。これは、かれの鋭い直観に基づく形成作用を考えてはじめて理解することができるのである。

結論的にいえば、ゲーテの認識方法は、anschauen と bilden と denken の共同の作業であるといってよい。そして対象を直観するうちに、統一的全体の姿が把握される。ヘルダー宛の手紙に、「わたしはとうとう自分の願望の目的を果たした、そして当地で、わたしを知っていられるあなたには想像がつくでしょうが、一種の朗かさと静けさをもって生活している。あらゆる事物をありのままに観、かつ読もうとするわたしの習練、眼をして光たらしめんとするわたしの誠実、あらゆる要求の完全な放棄、それらがわたしに、当地で、このうえもないひそやかな幸福を与えてくれる。日ごとに新しい注目すべき対象が、日々新しい偉大な珍しい形象が、そして、人が長い間考えたり夢みたりしているが、想像の力では決して達することのできない全体のすがたが見えてくる。」²⁷と書いている。

対象をありのままに観て、「眼を光たらしめる」ことによって「新しい偉大な珍しい形象」が見えてくると語るとき、シラーがしみじくものべたように、静かにまた純粹に事物の上に注がれるゲーテの観察する眼は、思弁や恣意的な想像力が陥りやすい主観性を脱し、事物の本質にふかく触れているといえる。イデーをとらえようとするとき、かれは観さへすればよい。「眼を光たらしめ」ればよいのである。つまりイデーが眼に見えるのである。冒頭にかかげた言葉にあるように、ゲーテの哲学的思索は「無意識な素朴さ」で行なわれ、「わたしは、さながら自分の見解を眼の前

に見る。」と思ったという表現は、よくかれの方法をいい表わしている。が、実はイデーは本来理想的なものであり、眼に映ずる対象は現実的なものである。イデーを眼で見るということは、明らかに ideal なものと real なものと混同させている。主体と客体を区別せず、主客合一の立場に立っているゲーテが、Idee と Erfahrung を同一に見ざるを得なかったのは、当然の成り行きであった。

さて、多少迂回したが、ここで先のゲーテとシラーとのあいだに交わされた対話にもどることにする。

二人の対話を深く検討すれば、極めて大きな意味をもって来る。二人は資質傾向において、両極といってもよく、ゲーテが現実主義者であるのに対し、シラーの方は観念論者である。シラーはカント学者として、自然科学は直観と悟性から構成されるべきものであり、ここにイデーを入れることは許されないという立場に立っている。ところが、ゲーテは科学はあくまで感性的経験に立脚すべきという立場に立っている。

対話において、「自然を分離した切れ切れのものとして処理しないで、自然を作用し生けるもの、全体から部分へすすみゆくものとしてあらわす他の方法」があるのにちがいないというゲーテの言葉に対して、シラーはさらに説明を求めている。というのは、「全体から部分へすすみゆく」という方法は、すでにのべたように、ゲーテ独自の方法を示すもので、カントの第三批判 (§ 77) の「総合的一般、すなわち全体そのものの直観から特殊にすすむ、換言すれば、全体から部分にすすむ」直観悟性の方法にはかならない。したがってシラーは、ゲーテの主張が経験からのみ生まれてくることがどうしても納得できなかった。そこでゲーテは特徴を素描して、「象徴的植物」をシラーの目の前に描いてみせた。説明を聞き終って、シラーは「それは経験ではない、イデーです。」と言い切ったことは、自然科学にイデーを導入することはできないという立場に立つシラーにとって、確信にみちた断言であった。しかし論議を戦かわせた末、二人とも自

分が勝者だと考えることができなかつた。シラーはゲーテの特質を理解し、自分の立場に固執して、ゲーテを論破することをやめた。一方ゲーテはシラーの拒否的断言に対して、「わたしがイデーをそれと知らずにもっている、しかも眼で観ているということは、うれしいことだといえましょう。」と答えて、シラーの主張をそのまま受けとらず、また自分の立場もことさらに強調することはなかつた。これは、感性的経験にたよりすぎ、いまだイデーの性格について十分検討を加えていなかったかたにとつて、シラーの言葉は思いがけなく急所をついたものといえる。が、シラーのきびしい批判に対して、自分の見解を主観的恣意、妄想でなく、イデーを眼でみているという客観性に対する確信は、決して打ちこわされることがなかつた。二人の対話はシラーの「イデーの特質はいかなる経験もそれに一致し得ないという、ちょうど、その点にあるのです。」という言葉で終っている。しかし、ゲーテが経験だと考えるものをシラーがイデーとみなすなら、両者のあいだには必ず媒介となるものが存在するにちがいないという問題が生じたのである。

要するにゲーテはイデーと経験を同一視していた。シラーに指摘されるまで無意識のうちに経験の中へイデーを導入していたといえる。かれ自身自信をもって眼に見たイデーとはいったい何か。イデーと経験がいかにゲーテにおいて融合されるか。この問題について、さらにかれの認識方法を考えながら論をすすめてゆきたい。

注

- 1 *Goethes Werke*. Hamburger Ausgabe. Hg. v. Erich Trunz. Hamburg 1948 ff (HA). Bd. 13 S. 26.
- 2 *Goethes Werke*. Weimarer Ausgabe. Weimar 1887-1918 (WA) II. Ab. Bd. 11 S. 13-20.
- 3 『優美と尊厳について』の中で、「単なる自然現象である人間の造形美は、中年ともなれば肥満のために醜くなり、顔貌の美しい動きが一様に脹らんでしまった脂

肪の詰物の中に消え失せて、自然によって与えられたものが自然によって取り返えられる。この造形美と同じ根源を持つ天才、自然によって賦与されている一切がただ澁刺旺盛な想像力であるような天才が、すみやかにこの曖昧なともいうべき自然の贈物を、精神の財産に変えるような唯一の使用によって確保することをしなければ、奔放な自然力は悟性の自由を越えてのさばり、そして人体の造形美の場合などと同じようにこの天才を窒息させてしまうだろう」とのべて、自然の所産ともいうべき天才を過大視することをいましめている個所がある。

- 4 7月20日から23日までのあいだと考証される。
- 5 Schiller an Körner. 1. IX. 1794.
- 6 Goethe an Schiller. 25. VII. 1794.
- 7 Schiller an Goethe. 24. VIII. 1794.
- 8 HA. Bd. 13 S. 25.
- 9 zu Eckermann. 4. II. 1829
- 10 Goethe an W.V. Humboldt 16. IX. 1799.
- 11 ebd. 3. XII. 1795.
- 12 Maximen v. Reflexionen. Nach den Handschriften des Goethe-und Schiller-Archivus hrsg. v.M. Hekker. Weimar 1907. Nr. 1150.
- 13 Dichtung u. Wahrheit Zweiter Teil. 6. Buch.
- 14 WA II, 5/2, 12.
- 15 Goethe an Schiller 15. XI. 1796.
- 16 ebd.
- 17 HA. Bd. 13 S. 37.
- 18 HA. Bd. 13 S. 38.
- 19 *Zur Farbenlehre*. Vorwort. HA. S. 317.
- 20 HA. Bd. 13 S. 38.
- 21 HA. Bd. 13 S. 39.
- 22 Goethe an Knebel 21. II. 1821.
- 23 *An Kenner und Liebhaber*. HA. Bd. 1 S. 53.
- 24 *Von deutscher Baukunst* HA. Bd. 12 S. 13.
- 25 拙稿『シュトウルム・ウント・ドラング期のゲーテの芸術観』（名古屋大学文学部研究論集 34 1964. 3. 参照
- 26 Goethe an v. Leonhard 12. X. 1807.
- 27 Goethe an Herder 10. XI. 1786.

Eine Betrachtung über Goethes Erkenntnisweise

Masahiro Yoshihara

In dem berühmten Gespräch mit Schiller, das zum Bund der beiden Dichter führte, entwickelte Goethe, als Beispiel einer naturwissenschaftlichen Totalitätserfahrung, seine Ideen über die Metamorphose der Pflanzen und ließ, mit manchen charakteristischen Federstrichen, eine symbolische Pflanze vor seinen Augen entstehen. Schiller aber schüttelte den Kopf und sagte: Das ist keine Erfahrung, das ist eine Idee. Etwas verdrießlich erwiderte Goethe: Das kann mir sehr lieb sein, daß ich Ideen habe, ohne es zu wissen, und sie sogar mit Augen sehe.

Schiller war bekanntlich Idealist, dagegen war Goethe Realist. Goethe sagte, er habe Ideen, die er mit Augen sehe. Schiller aber anerkannte als Kantianer keine Idee, die man durch Erfahrung erfassen kann. Er behauptete: Wie kann es jemals Erfahrung geben, die einer Idee angemessen wäre? Denn darin besteht eben das Eigentümliche der letzteren, daß ihr niemals eine Erfahrung entsprechen kann. Aber Goethes Argument: Wenn Schiller das für eine Idee hielt, was ich als Erfahrung aussprach, so muß doch zwischen beiden irgend etwas Vermittelndes, eine Beziehung bestehen.

In der Goetheschen Erkenntnisweise gibt es die Mischung zwischen Idee und Erfahrung. Der Anthropologe Chr. A. Heinroth

bezeichnete Goethes Erkenntnisweise als „Gegenständliches Denken,“ das Goethe für sich so auslegt: sein Denken sondere sich nicht von den Gegenständen, sondern die Elemente der Gegenstände, die Anschauungen gingen in dasselbe ein und würden von ihm auf das innigste durchdrungen; sein Anschauen selbst sei ein Denken, sein Denken sei ein Anschauen. Auch in dem Aufsatz *Einwirkung der Neueren Philosophie* sagt er: Wenn ich nach meiner Weise über Gegenstände philosophierte, so tat ich es mit unbewußter Naivität und glaubte wirklich, ich sähe meine Meinungen vor Augen.

Nach dem Gespräch mit Schiller überlegte er sich nochmals seine eigne Erkenntnisweise und suchte die Kluft zwischen Idee und Erfahrung zu überwinden. Diese kleine Abhandlung soll dieses Problem anschaulich machen.